植民地都市リマの誕生と展開

梅　原　隆　治

中・近世のはざまの大航海時代には、コロンブスによるいわゆる新大陸発見以降の新世界に、イベリア半島風の諸都市（植民地都市）が次々と建設されていった。中でもコルテス（Hernán Cortés, 1485?-1547）によって滅ぼされたアステカ帝国の首都のテノチティトラン（Tenochititlán）跡地につくられたメキシコ・シティー、ピサロ（Francisco Pizarro, 1478?-1541）によって滅ぼされたインカ帝国の地に建設されたリマは、それぞれ副王領の首都として繁栄をつづけ、20世紀後半には世界を代表する巨大都市へと成長した。大気汚染やスラムの肥大化といった都市問題まで共通している。

そのリマが、どのような地に、どのように建設され、そして成長していったのかを、残された都市プラン図を基に考察する。

キーワード：植民地都市、リマ、都市プラン（都市図）

はじめに

南米の国ペルーには世界に名だたる世界遺産のマチュピチュ遺跡（「マチュ・ピチュの歴史的聖域（Historic Sanctuary of Machu Picchu）」1983年に複合遺産登録）やナスカの地上絵（「ナスカとフマナ平原の線と溝（Lines and Geoglyths of Nazca and Pampas de Jumana）」1994年に文化遺産として登録）があり、世界中から数多の観光客が集まる。大半の旅行者は首都リマのホルヘ・チャベス（Jorge Chavez）国際空港に降り立つが、旅程が厳しいほどリマでの滞在時間は短い。だがそのリマにも、1988年にユネスコから世界文化遺産に指定された「リマの歴史地区（Historic Centre of Lima）」がある。現在でもセントロと呼ばれる中心市街地で、大統領府もあれば市民の憩いの広場もある。少々治安が悪く、旅行者に敬遠された時期もあったが、今は観光客もよみがえっている。まさにこの地が、砂漠の中に征服者によって建設された植民地都市（コロニアル・シティー）リマの発現地なのである。

先般、筆者は現在の大リマ市のかかえる都市問題を、非合法街区（バリアーダス）の拡大過程を通して若干の検証・考察を試みた[1)]。本稿では、そのリマ市の誕生と成長のプロセスを、クロニカ（年代記）や近世・近代に描かれた絵図を材料に、歴史地理学の立場から考察してみる。手許に置いていた“*PLANOS DE LIMA 1613-1983*”[2)]に収められた30葉の図に陽の目を当て活用してみようと思ったからではあるが、これによって新大陸における植民地都市の特徴と変容の過程を少しでも明らかにし、さらに肥大化した現在都市の考察の一助ともしていきたい。

1　インカ期アンデス地域の都市的集落

コロンブスによって新大陸が発見され、第11代のインカ皇帝ワイナ・カパック（Huayna Capac, 1493-1525）が最大版図のタワンティンスーユ（Tawantinsuyu、ケチュア語で四つの州の意で、インカ帝国のこと）を統治していたころ、帝国内にはどれほどの都市的集落があったのであろうか。1533年にスペイン軍が侵攻した時に人口20万を擁していた首都のクスコ（Cuzco、ケチュア語でへその意。ペルー南部の標高3500mの盆地にある町）や、最後のインカ・第13代のアタワルパ（Atahualpa Inca, ?-1533、ワイナ・カパックの非嫡出子）が1532年にピサロによって捕縛され、翌年に処刑されたカハマルカ（Cajamarca、ペルー北高地の標高2750mの盆地にある町）が都市であったことは疑うまでもないが、それらに準ずるいわゆるマチがどの程度、どこにあったかを示す資料は見当たらない。インカ帝国やアンデス文明に関する研究書に、インカやプレ・インカ期の遺跡分布図を載せているものは多いが、遺跡のある場所がマチであるとは限らないであろうし、たとえプレ・インカ期の都市的集落祉であっても、15－16世紀にもそうであったとは言い切れない。

図１は、アメリカの考古学者ヒースロップが描いたインカ王道の分布図[3)]をベースに作成したものである。その中で黒く塗りつぶしたところがインカ期に地方センターとして機能していたところである。宿泊施設や倉庫群を伴っていたではあろうが、インカ王道は必ずしも既存の集落を結んでいるわけではないので、都市的集落と呼びうるものはその中の黒■マークのところぐらいであろうと考えられる。図中の白□マークは、スペインによる植民期以降に建設されたコロニアル・シティー、植民地都市である。『マクミラン世界歴史統計』の「南アメリカ：主要都市の人口」項[4)]には、表中初年の1750年欄にトルヒーヨが9,000人で登場し、1790年欄にリマが53,000人、アレキーパが24,000人で顔を見せている。ちなみにこの時点で南米最大と次点の都市である。

もともとアンデス地域の先住民族がさほど都市的集落に住んでいなかったのは、インディヘナ出身のクロニスタ（cronisuta, 年代記作者）、グァマン・ポマ（Felipe Guamán Poma de Ayala, 1534?-1615）の『新しい記録と良き統治（“*El Primer nueva crónica y buen gobierno*”t.1（México, 1980）, pp. 951, 762, 769.）』における次のような記述からもうかがえる[5)]。

> 副王ドン・フランシスコ・デ・トレドはこの王国の村々を取りつぶし、インディオたちを集住させるよう命じました。そのとき以来、インディオたちは以下に挙げる理由で、死に絶え、また、現在も絶滅しつつあります。まず第一に、インディオたちが先祖代々つづいた村々を離れてしまったからです。…（略）…ついで、新しい村が建てられた場所が湿度の高い土地で、それゆえ数多くの疫病が流行し、数限りない病気が蔓延しているからです。…（略）…三番目に、場所によっては、人々の住む村に、太陽、月、あるいは、星の光がこうこうと照りつける関係で、有害な空気が漂い、その結果、病気が発生するからです。四番目に、すでに別の箇所でも触れましたが、発酵させる以前の葡萄の搾り汁や葡萄酒、チチャによる泥酔、コカ、水銀によって、インディオが死んでいます。…（略）…。

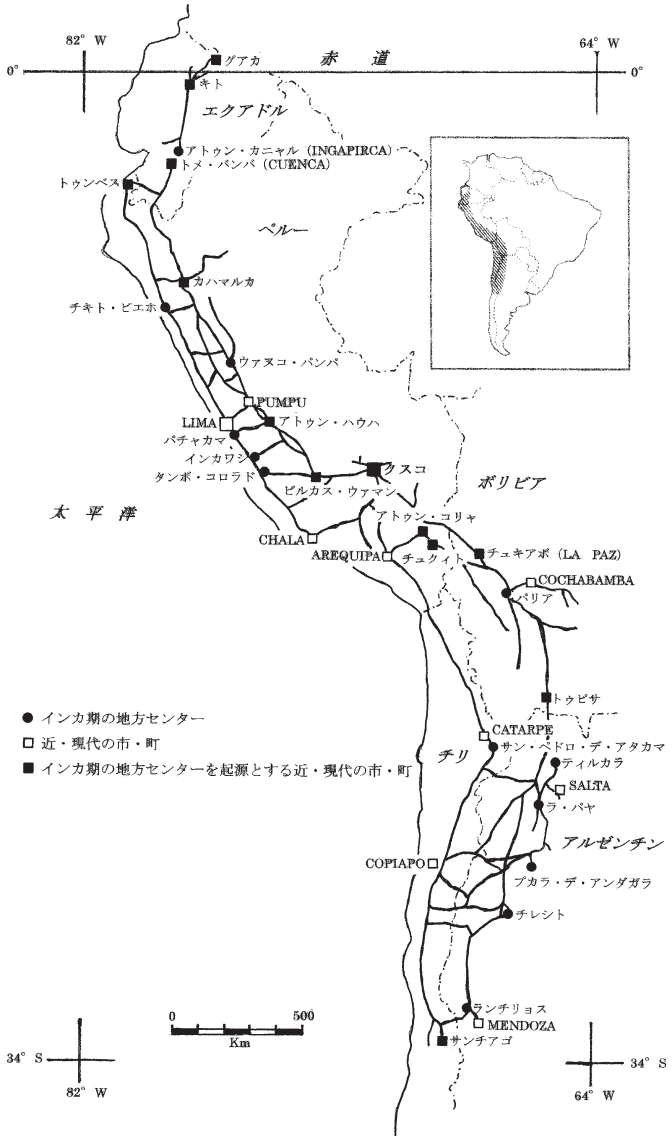

図1　アンデス地域の都市的集落

この文章からは、先住民の多くが元来は彼らの村落共同体（アイユ ayllu）で暮らしていたが、その地が荒廃し先住民人口が激減したため、新たにスペイン風に作った共同体（レドゥクシオン reducción）へ集住させようとしたこと、また先住民がばたばたと死んでいった理由が読み取れる。新たな共同体への集住政策に関して、染田秀藤は「人口数の正確な把握を通じて、徴税作業を迅速かつ円滑に行えるようにするとともに、地方統治体制を確立するという、明らかに植民地主義理論に基づく実利的な目的の達成であった」としている。また染田は『ラテンアメリカ史－植民地時代の実像』の中で、先住民人口減少の原因として、①残虐非道な征服戦争と真珠の採集、プランテーション（主に砂糖生産）、鉱山や紡績工場（オブラへ）における過酷な強制労働、②ペスト、天然痘、チフス、麻疹、インフルエンザ、赤痢など、先住民が免疫をもたないヨーロッパの疫病の流行（たとえば1558年から59年、クスコからキトにかけて、天然痘が流行し、リマの人口は5分の1に減少）、さらに、③征服後の過酷な植民地体制のもとで先住民を襲った栄養失調による死亡や集団自殺、嬰児殺しといった形で現われた「生きる意欲の欠如」、をあげている[6]。（表１参照）

表１が示すように、1520年からの100年間にペルー副王領内のインディヘナ人口は7.6％にまで減じている。山岳部の合計値が16.1％になっているのに比べ、海岸部の減少はさらに厳しく、リマ市の存する中部海岸（表中イタリック）では1520年の1.7％にまで減じているのである。

その過程で、スペインからの新たな入植者によって、コロニアル・シティー、リマが成長していくことになる。

表１　ペルー副王領のインディヘナ人口の減少（1520－1630 年）

（人）

地　方	1520年	1570年	1580年	1590年	1600年	1610年	1620年	1630年
北部海岸	723,311	80,123	62,706	49,975	40,449	33,263	27,787	23,578
中部海岸	*2,859,540*	*128,820*	*101,399*	*82,044*	*67,710*	*56,942*	*48,715*	*42,323*
南部海岸	1,635,480	36,587	26,406	19,883	15,394	12,164	9,844	8,168
北部山岳	694,094	209,057	180,753	163,366	146,274	131,034	117,737	106,125
中部山岳	975,697	240,604	207,094	180,992	159,071	140,052	123,776	109,801
南部山岳	1,977,220	595,528	528,315	471,946	423,104	380,578	343,655	311,557
合　計	8,865,142	1,290,680	1,106,662	968,197	851,994	754,024	671,505	601,645

Noble David Cook, Demographic Collapse, Indian Peru, 1520-1620（Cambridge / New York, 1981）, p.94 より作成

2　征服前のリマ近辺

現在のリマ市のセントロの辺りが、都市建設の始まる前はどのような地であったのか、いくつかのクロニカの記事から探ってみたい。

まずインカの皇族の血を引くメスティソのクロニスタ、ガルシラソ・デ・ラ・ベガ（El Inca Garcilaso de la Vega, 1539-1616）は、『インカ皇統記２』の第６の書の第30章で、リマの名のいわれを次のように述べている[7)]。

> チュキマンク王が屈服し、彼とその配下の者たちが遵守すべき掟や慣例が教示されて統治体制が整うと、インカの王子と将軍は大軍を率いて、さらに、パチャカマック、リマック、それにスペイン人がバランカと呼んでいるワマンの谷の征服に向かった。…（略）…なお、煩瑣な繰り返しを避けるため、ここでは、パチャカマックの谷とリマックの谷にまつわる記述だけに留めようと思うが、このリマック Rímac とは、スペイン人がその音を訛らせてリマ Lima と呼んでいるところである。…（略）…
>
> リマックの谷はパチャカマックの北４レグワのところにある。リマックという語は現在分詞で、「話す者」を意味し、この名は、その谷にあった人間の形をして話すことのできたといわれる偶像、すなわち、古代異教世界におけるデルポイのアポロンをはじめとする多くの神託伝授者のように、人びとの質問に答えて話したという偶像にちなんだものである。そうした性質ゆえに、その偶像がリマックと呼ばれ、その谷にも同じ名がつけられたというわけである。
>
> ユンカスたちはこの偶像をたいそう崇敬し、また、その美しい谷を征服したインカ族も同じくそれを崇拝した。ところで、後になってスペイン人がその谷に諸王の都と呼ばれる市を建設したが、その名の由来は、市の創設された日が御公現の祝日、つまり救世主が異教徒の前にそのお姿をお現わしになった日［従って、「諸王の都」の諸王とは、本来、東方の三博士を意味する］だったことにある。そんなわけで、リマックもリマも諸王の都もすべて同じ場所なのであり、その紋章は三つの王冠とひとつの星からなっている。

またスペイン人コンキスタドールのクロニスタ、シエサ・デ・レオン（Pedro Cieza de León, 1518?-54）は、客観的な記述内容で信憑性も高いとされる『ペルー誌（*Crónica del Perú*）』の第71章で、この地が選定された理由について次のように述べている[8)]。

> リマの谷はこれまでトゥンベスからここに至るまでに記したどの谷よりも大きくて広い。したがって、大きな谷であったから、昔は大勢のインディオが犇めき合って暮らしていた。今では、この土地のインディオはほとんどいない。と言うのも、彼らの土地に〔スペイン人の〕町が建設され、畑や灌漑施設が占拠されたため、住民はそれぞれ、あちこちの谷へ移住してしまったからである。たまたま生き残っているインディオでもいれば、彼らは土地や用水路を有し、畑を灌漑していることだろう。前線司令官ドン・ペドロ・デ・アルバラードがこの王国に進入したとき、国王陛下からペルーの総督に任命された前線司令官ドン・フランシスコ・ピサロはクスコ市に滞在していた。このとき、将校ドン・ディエゴ・デ・アルマグロが、リオバンバに関する章〔第42章〕ですでに言及したように、〔アルバラードと対決するために〕出陣した。前線司令官ピサロは海岸部の地方が占領されるのではないかと恐れ、自ら海岸地方へ下り、この谷に町を建設する決意を固めた。その当時、トゥルヒーリョもアレキパもグァマンガも、また、どの町もまだ建設されておらず、いずれもそれ以後に建設された町である。総督ドン・フランシスコ・ピサロは町の建設を考えていたので、サンガリャの谷をはじめ、海岸部のいくつかの場所を視察してから、ある日のこと、数名のスペイン人を率いて、現在、町が立っている場所へ下りてきた。そして、彼には、その場所が町を建設するのにふさわしく、また、その必要条件を満たしているように思えた。そうして、すぐに町は設計され、この谷の平坦な場所、海から2レグワ離れた所に建設された。この町の上、東の方に川の源があり、山岳地方が夏になると、川にはほとんど水が流れない。山岳地方が冬になると、水嵩がやや増し、西方から海へ注いでいる。この町は、太陽が斜めに川を横切ることは決してなく、町の一方から陽が昇るように立っている。

山本紀夫も、『ジャガイモとインカ帝国　文明を生んだ植物』の中でサンチョのクロニカ（Pedro Sancho ?-1534 *Relación para S. M. lo sucedido en la conquista y pacificación de estas provincias de la Nueva Castilla*. 1543. ペルー征服者フランシスコ・ピサロの秘書の報告書）を引用し、トゥンベスからチンチャにかけての海岸部は、幅が10レグア（１レグアは約5.6キロメートル）前後の平坦な砂漠地帯で、わずかな雨量で草も育たないのに、トウモロコシや果物が豊かに実るが、それは山岳地帯から下る川の水を使って灌漑耕作がおこなわれているからである、と指摘している。そしてこの灌漑が、スペイン人が南アメリカに最初に建設した都市であるリマをも潤していたとする。ムルーア（Martín de Murúa *Historia General de Perú, Origen y Descendencia de los Incas. 1590-1600*）が「リマック川からは、川とよんでもよさそうなほど幅の広い用水路がひかれている。その用水路は２本にわかれ、広大なリマの谷全体にゆきわたっている。そこが雨量に乏しく、土地を湿らすには不十分だからである。（中略）このように川

から２方向にひかれる水によって、小麦やトウモロコシの畑、そして果樹園などが4レグア以上にわたって広がっている」と述べていることも紹介している[9)]。

これまで、リマが建設される前の周辺状況をクロニカを手掛かりにみてきたが、征服者たちが訪れた時点で都市的集落であったところを、概観してみたい。クロニカにしばしば登場するパチャカマと、現在は市街地に包含されているインカ王道と関連するタンボ・インガである。

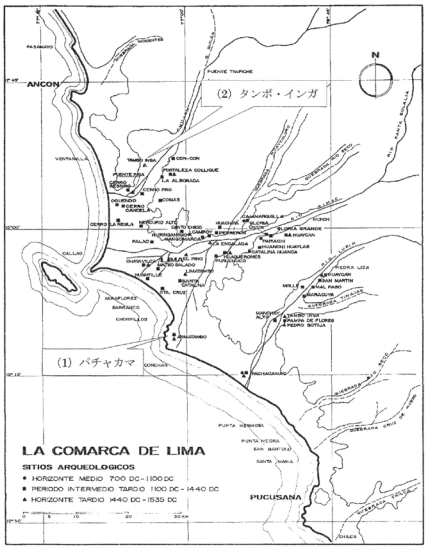

図２　リマ周辺の前植民地期の遺跡分布図[10)]

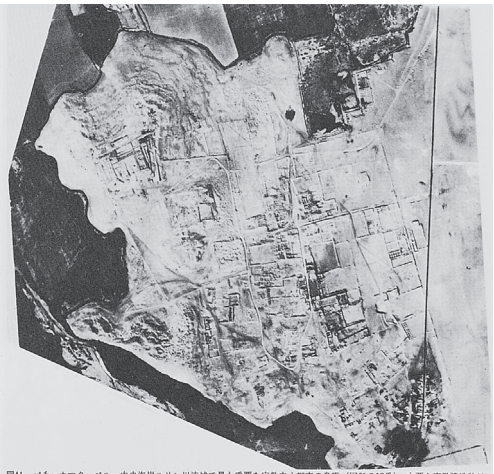
図41　パチャカマク。ペルー中央海岸ルリン川流域で最も重要な宗教中心都市の鳥瞰（図61の12番）。主要な宗教建造物は，左方の丘の頂上，耕作地域に隣接して建っている。パン・アメリカン・ハイウェーが右側で遺跡を横切っている。

図３　パチャカマ遺跡空撮画像[11)]

図４　アクリャワシ（月・処女の館）

図５　太陽神殿

［いずれも2008.8.12.筆者撮影］

（１）パチャカマ（Pachacamac）

リマ市の南郊のルリン河谷北端にある太平洋に面して築かれた巨大な神殿祭祀遺跡である。形成期末からインカ期にかけての長きにわたって利用されてきたが、その中心は地方発展期の３世紀から８世紀にかけてのリマ期にある。その後もパチャカマの主神の影響力は強まり、10世紀ごろには海岸地方で最も重要な神殿都市に発達している。神託を伺いに訪れる巡礼者は、海岸部にとどまらず、アンデス各地に及んでいる。15世紀末までにはインカによって征服され、

国家宗教を執り行う太陽神殿や、そこに仕えるママクーナの住む月の館アクリャワシ（処女の館）がつくられ、クスコ地方を除くインカ最大の宗教の中心地となっていった。征服者たちもこの地に滞在し、リマに先立って新都市建設の候補地として考えられたこともあった。

（2）タンボ・インガ（Tambo Inga）

タンボ・インガは、リマの市街地をパン・アメリカン・ハイウェー沿いに北へ向かい、チヨン川を越えてしばらくのすぐ西にあるインカ期のセンター跡である。カルボによれば、南東から北西に長く曲線的に伸びる形で積み上げられ、滴を落としたような形で西側に補遺がある。東の大きい方は、幅が70m、長さは320m、高さは７mで、西側の補遺はそれぞれ35m、120m、５mである。基本構造は高台の上層に展開しており、東のより大きな高台の上で中央行政が展開し、小さいほうの上は生活空間であったと考えられる。また、この小山の最下層には、防壁が取り囲んでいた痕跡があるが、おそらくはこの施設へのアクセスを管理し、安全を保つためであったのであろう[12)]。ルンブレラスは、インカが海岸砂漠地帯へ押し寄せた際に、多くの神聖な建物がクスコ人によって改築され、以前よりずっと効果的な行政・宗教の支配の座に変えていかれ、計画的な地域社会もつくられた、と述べ、そのリマック川流域における好例として、リマ北方のこのタンボ・インガを挙げている[13)]。交通関連の施設というだけではなく、この地方のセンター的な役割を演じていた集落だったのであろう。

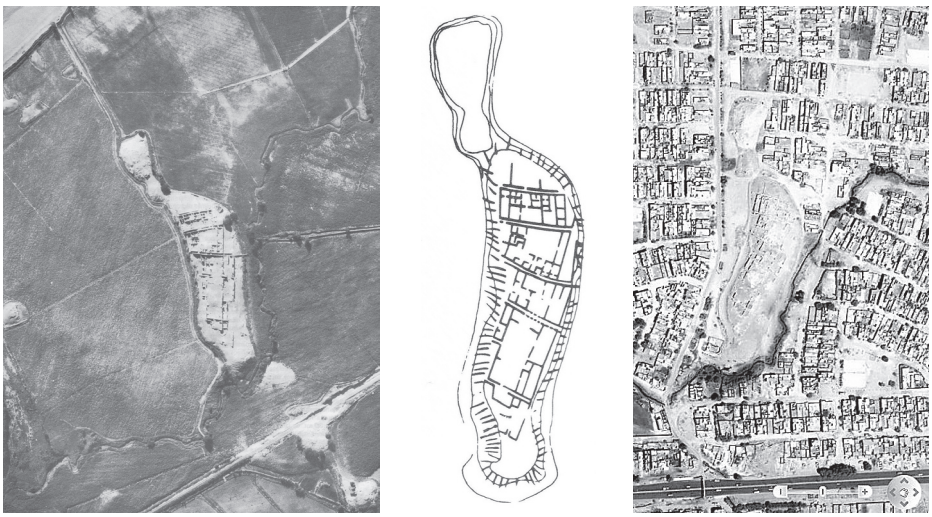

図６　タンボ・インガの1945年空撮画像・復原図（前掲注12）p.163、p.165）と近影グーグル・アース画像（右）

３　植民地都市リマの誕生

前章で引用したシエサ・デ・レオンによると、前線司令官ピサロは海岸部の地方が占領されるのではないかと恐れ、自ら海岸地方へ下り、この谷に町を建設する決意を固めた。そのあたりの事情を、クロニスタのペドロ・ピサロ（Pedro Pizarro, 1515-87）は『ピルー王国の発見と征服“*Relación del descubrimiento y conquista del Perú*” 1571』の第17章「侯爵が、エスパニャ

人の町をハウハに建設するためクスコを出発したこと。これはのちにリマに移された」で、次のように述べている。いささか長いが、リマ市誕生に大きく関わる内容であるので、以下に引用する[14)]。

さて侯爵は、クスコを発つと、エスパニャ人の町を建設するためハウハに赴き、そこでソトとマンゴ･インガと出会った。彼らは､キスキスのひきいる戦士たちを潰走させて戻ってきたところだったのだ。…（略）…

ドン・ディエゴ・デ・アルマグロは、何人かのエスパニャ人とともにキートに行ったが、それは、ドン･ペドロ･デ･アルバラードが､500の兵をひきいてグァティマラ〔グァテマラ〕から渡航し、プエルト・ビエホ〔エクアドル海岸〕に上陸して、そこから山を越え、キートに向かっている、という知らせをうけたからだった。実際その通りのことが起こっていたのである。…（略）…

さて、ドン･ディエゴ･デ･アルマグロは、キートに着くと、ドン･ペドロ･デ･アルバラードがすでに近くに迫っていると聞き、使者を送って、キートはすでにじぶんの僚友ドン・フランシスコ・ピサロの手で植民されており、この地で争乱をひき起こして陛下に御心痛を与えることがないようにしたい、と伝言した。そこで、ドン・ペドロ・デ・アルバラードは、王国全体が侯爵の手で平定され、そこにいくつかの町が建設きれていることを知って、ドン・ディエゴ・デ・アルマグロと会見するために到着し、兵団編成に要した費用の支払いをうけて全員を同地に残し、グァティマラに帰ることを約束した。そして、支払い金額が９万ペソときまると、連れてきた兵を引きわたし、彼とドン・ディエゴ・デ・アルマグロは、すべての兵を引きつれて、パチャカマに行軍した。

ここで植民のためハウハにいる侯爵のことに戻ると、彼は近辺のインディオの分割をおこない、ハウハの町を建設した。これは、ドン・ペドロ・デ・アルバラードとの協約成立の知らせが着く前におこなわれた。エスパニャ人の数は少なかったから、高地の数多い住民が反乱など起こさないようにするため、高地をないがしろにしてはならなかった。そこで〔ハウハの〕植民がおこなわれたのだった。…（略）…

これが終わると、侯爵は、ひじょうに評判の高いパチャカマとチンチャを見に行きたいと思い、20名をひきいて出発した。ハウハには、そのころグァテマラからやってきたグラビエル〔ガブリエル〕・デ・ロハスをじぶんの代理として残した。

こうして侯爵はパチャカマに向かって出発し、やがてそこに到着して数日すると、グラビエル・デ・ロハスが、当地は情勢不穏で反乱蜂起のおそれあるため、至急ハウハに帰還されたし、と書簡をよこした。それを受けとると、侯爵はすぐ出発してルナグァナ〔ルナワナ〕の谷をさかのぼり、ハウハに着いて、エスパニャ人たちの歓迎をうけた。インディオたちはなりをひそめてしまった。

そうこうするうちに、アルマグロからの使者が到着した。…（略）…侯爵ドン・フランシスコ・ピサロは、同僚の成功と500人のエスパニャ人の到来を知り、原住民たちへのおそれがなくなったので、ハウハの町を現在の場所、すなわち諸王の都［リマ市］に移す決

意を固め、すぐ出発して、パチャカマに居をかまえた。そしてドン・ペドロ・デ・アルバラードとドン・ディエゴ・デ・アルマグロを待つかたわら、（右に述べたように）のち植民がおこなわれたリマの谷の諸王の都の場所を偵察に行かせた。そのころドン・ディエゴ・デ・アルマグロとドン・ペドロ・デ・アルバラードが、この王国に渡ってきたすべての兵とともに到着した。彼らが着くと、みな大よろこびで、籐打ちの競技を催した。ドン・ペドロ・デ・アルバラードは、数日間休息すると、金をもらい―ただしその半額はアルマグロのものだった―、部下をすべて残したまま出帆して、グァティマラに戻った。侯爵はリマに移り、現在の諸王の都を建設した。

いわゆる征服期の混乱の様が読み取れる箇所ではあるが、そこからはリマに先立ってピサロによってハウハの町が建設されたこと、その地が不穏な界隈であったこと、中部海岸のパチャカマやチンチャが注目されていたこと、そしてパチャカマを基点にして新都リマの建設に着手したこと、などが読み取れる。ハウハとは図１のアトゥン・ハウハ（Hatun Xauxa）で、1533年、もしくはその翌年に建設された。コボによると、ハウハの市民たちが1534年11月29日付でピサロに送った書簡で、この地は不便なので海岸に町を移すよう要請したという。そこでまずは中部海岸のパチャカマが注目され、その後リマック川の河口近くにリマ市が建設されることになった。その日付は1535年１月18日で、リマというインディオの集落そのものの場所に建設され、建設が終わるとハウハの市民が全員そこに移った、ともしている[15)]。

増田義郎は『アステカとインカ黄金帝国の滅亡』の中で、ピサロがハウハに気をかけたのは、そこに大量の金銀が集積されていたからだとする。また、ルナワナの谷で大勢の荷担ぎがスペイン人のための食糧や物資を高地に向かって運び上げているのを見て、このような労力を使うようならば海岸に首都を設けたほうがいい、と考え、大宗教都市パチヤカマを候補地として考慮したのち、それより約30キロメートル北のリマック川の河口に首都を定め、1535年１月の初めに「諸王の都（シウタ・デ・ロス・デ・レイエス）」が建設された、としている[16)]。その町がリマ（現ペルーの首都）と呼ばれるようになったのは16世紀末で、以来この町は南アメリカ大陸におけるスペイン植民地の中心となり、外港カリャオは、パナマや本国スペインとの接触点となった。

スペイン植民地における最高統治者は副王であった。征服による領土拡大に伴い、ヌエバ・エスパーニャ副王領（1535年）とペルー副王領（1543年）が設置され、前者はテノチティトランの廃墟の上に建設されたメキシコ市を副王都とし、カリブ海域からマニラ（フィリピン）までの広大な領域を管轄した。ペルー副王領はリマを副王都とし、パナマおよび南米のスペイン領の大半を管轄下に置いた。さらに、18世紀後半には、ヌエバ・グラナダ（1717年、副王都サンタ・フェ・デ・ボゴタ）、リオ・デ・ラ・プラタ（1776年、副王都ブエノスアイレス）という二つの副王領が新設された。そのころまで、リマは南米大陸でもっとも重要な位置を占め続け、第一の都市として繁栄した。

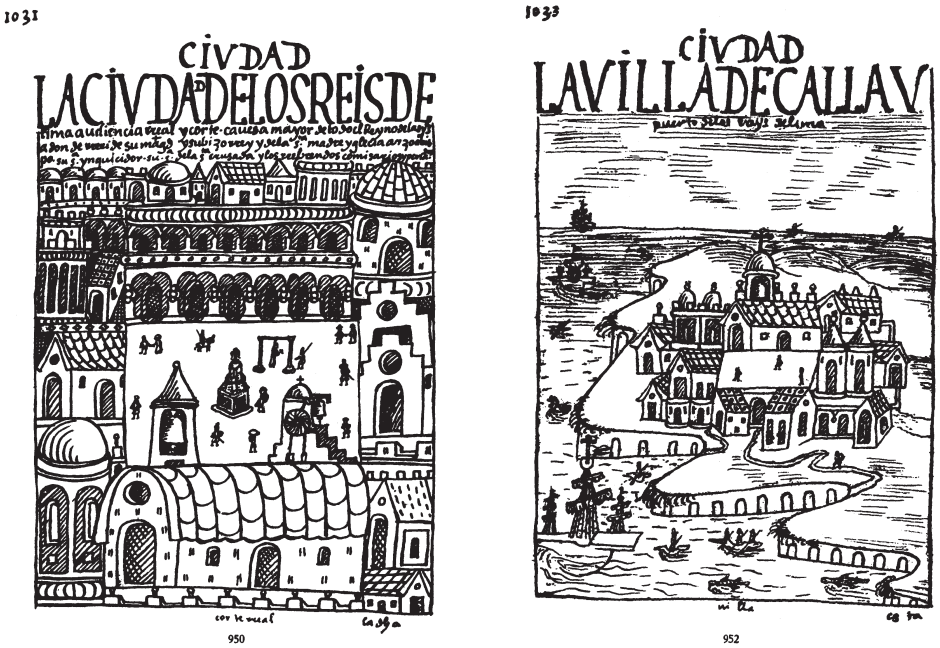

図７　グァマン・ポマが描いたリマ（左）とカヤオ（右）の町
（筆者所有の復刻版“*EL PRIMER NUEVA CORONICA Y BUEN GOBIERNO por FELIPE GUAMAN POMA DE AYALA[WAMAN PUMA]*” Instituto de Peruanos, 1980, p.950,p.952）

4　植民地都市の空間構造

一口に植民地都市と言っても多彩な空間が存在しよう。そこで、まず地理学における用語としてそれを見てみる。

植民都市　歴史的に見て狭義にはギリシア時代の植民都市であるアポイキア Apoikia のこと。B.C.750-550年、ギリシア人は地中海・黒海沿岸各地に多くの植民都市を建設した。現在のイスタンブール Istanbul・ナポリ Napoli・マルセーユ Marseille などはこの時期の植民都市に起源をもつ。ローマ時代にもコロニア Colonia と称する植民都市が各地に多数建設された。さらに近世の大発見時代以後、新大陸やアジア・アフリカの各地にヨーロッパ人による植民都市が建設されたが、それらは周辺地域の政治的支配の拠点、商業･交通（とくに海上交通）上の要衝をなし、また計画的・規則的な街路網を有するなどの特色を持っていた。（藤岡謙二郎編『最新地理学辞典』大明堂、1971年、p.203）

植民地都市　colonial city　植民地統治下の宗主国の経営のもとに形成された都市。宗主国の意向が反映した都市形態や景観の存在、民族別居住分化の進行、支配・被支配関係のなかでの人々の緊張関係や対立、同化や融和の問題が顕在化するのが常である。独立を画期に、支配・被支配の関係が崩壊した後、新たな都市作りにおいて、コロニアルな建造環境がさまざまな使用価値を見出されながら変容していく状況には､様々な形態が見出される。（浮田典良編『最新地理学用語辞典』大明堂、2003年、p.137）

30年を経て両者に標記の違いは出ているが、いずれにしてもコロニアル・シティーとは植民者側のプランニングが主体となった町づくりであり、建造であった。そのスペイン領植民地におけるコロニアル・シティーの普遍的特徴について、メキシコ・シティーやサン・クリストーバル・デ・ラス・カサス市街図の研究を通して、清水透は次のように要約している[17]。まず①いずれの都市もスペイン王の命に従って建設され、②中心部に広場、③その広場を90度の角度で取り囲むように大聖堂と市参事会（カビルド）の建物を配置する。④広場を中心に碁盤目状に街路を設け、⑤中心部に特権階層の居住区、その周辺に非特権階層の白人居住区を設定する。そして先住民の攻撃の危険がある地域では、⑥城壁や河川など自然を利用した防壁で都市を取り囲む、というものである。

5　植民地都市リマの空間構造

シエサ・デ・レオンの『ペルー誌』第１部第71章には「この町はペルー王国中でクスコに次ぐ大都市であり、最も重要な都市である。ここには数多くの立派な館が建ち並び、中には塔やテラスを備えた素晴らしい屋敷もある。広場は大きく、街路も広い。家の建ち並ぶ大部分の街路を用水路が走り、それは非常に便利である。彼らは用水路の水を利用して果樹園や庭を灌漑している。果樹園や庭は多く、さわやかで心地がよい。現在、この町には、宮廷と王室裁判所が設置されている。そのために、また、ティエラ・フィルメの王国中の商いがこの町で行われているので、町は常時、大勢の人で溢れ、大きくて立派な店がいくつもある。…（略）…結局のところ、わたしがこの町をあとにしたとき市民はほとんど全員、富裕で繁盛していた」といった記述がある[18]。レオンが帰国する16世紀半ばのリマの様子ではあるが、先述の要約の②・④・⑤にあたるところが読み取れる。

また「ペルーの副王の招待のおかげでリマにやって来たわれわれは今、大いなる豊穣の地リマ、ペルー副王領の首府にして、南アメリカ諸都市のなかの女王と称えられるにふさわしい壮麗さと偉容を備えた都リマに、読者を導き入れることができるのである。」と書き出すウリョーア（Antonio de Ulloa 1716-1795）とファン（Jorge Juan 1713-1773）による『南米諸王国紀行』の第２部第１の書の第３章には、18世紀のリマ、ただし1746年10月28日の大震災前のリマ（彼らの南アメリカ滞在は1735-1744年の10年間）が、生き生きと描写されている[19]。（［　］内は筆者の注記）

> 正方形のゆったりとした広場は美しく飾りたてられ、その真ん中には、大きさといい華麗さといい並大抵ではない、見事な噴水がある。…（略）…［先述の②］
>
> 広場の東側を占めているのは大聖堂と大司教館で、これらはその高さにおいて、市内のいかなる建築物をも凌駕している。大聖堂の主だった礎石、円柱や角柱の土台は、西に面しているその正面フアチヤーダと同じく、すべて細工の施された石でできている。内部の設計はセビーリヤの大聖堂を模しているが、規模はそれほど大きくない。外側の装飾で最も技巧が凝らされ最も壮観なのは、なんと言っても正面で、その中央部は主玄関に、また、両脇は塔になっている。…（略）…広場の北側の一面には副王宮が立ちはだかっており、

この宮殿のなかに民事、刑事を含むすべての裁判所、王室財務局および王立監獄が併置されている。往時この建物は、その構成といい、造りといい、なんとも見事な堂々たるものであった。しかし、1687年10月20日のほとんど全市街を壊滅させた地震で、この建物も大部分が崩壊し、僅かに盛り土の上に築かれた低層部分のみが残ったのであるが、その部分は現在、副王とその家族の住居となっている。

広場の西側、すなわち大聖堂の向かい側には市庁舎と市立監獄があり、南側には個人の豪邸が並んでいる。西側と南側の建物は平屋（ひらや）ながらどれも石造りの前廊つきで、いずれ劣らぬ豪壮な門構え、一連のアーチ、そしてしょうしゃなたたずまいは、その場に調和をもたらし、広場の美しさをいや増している。なお広場は、一辺の長さが80トワーズ、スペイン風に言えば、186バーラ半［1vara≒83.59cm、約156m］という大きさである。［先述の③］

リマ市は逆三角形をしており、そのいちばん長い辺はリマック川によって形成されている。その長さは1920トワーズ［1toise≒2m、3840m］、すなわち、4471バーラ３分の１［約3778m］であり、これはちょうど３分の２レグワ［1legua＝5000varas≒5572m、約3678m］、あるいは２海里に相当する。そして南北の最大幅、とはすなわち、リマック川に掛けられた橋からその向かい側の、三角形の２辺がつくる角（かど）までの距離であるが、これは1080トワーズ［約2160m］、あるいは2515バーラ［約2103m］、あるいは５分の２レグワ［約2229m］である。市全体を取り囲んでいる日干し煉瓦の壁は、それ本来の目的にはかなった分厚いものであるが、場所により大きさはまちまちである。パラータ公爵によって手がけられ、1685年に完成されたこの市壁には、34の稜堡が設置されているが、そこには砲台も銃眼もない。それと言うのも、これがもっぱら市街を囲みこむことのみを狙いとしていたからであり、これだけで、インディオたちのどんな奇襲にも対処し得たからである。なお市壁には全体で七つの城門と三つの通用口があって、外部との出入りに用いられている。［先述の⑥］

川をはさんだ市街地の反対側には、サン・ラサロと名づけられた郊外地区があり、ここは近年、著しく膨張している。郊外地区でも市内でも、道路は十分に広くてまっすぐに伸び、それぞれが平行に走ったり、直角に交わったりしている。従って、南北に走る道路と東西に走る道路とが互いを区切っているわけであるが、その１区画の長さは150バーラ［約125m］である。このように、リマとその周辺では１区画と言えば150バーラと理解されているものの、キートなどではわずか100バーラ［約84m］である。街路はすべて石畳で舗装されており、そこを、市街地よりやや上流から引かれた川の水が流れている。疏水の大部分はアーチによって支えられているが、こうした水路が市民生活の邪魔になることはまったくなく、むしろ街を清潔に保つのに役立っているのである。［先述の④］

先述の⑤に該当する街区割に関する直接的な記述は、残念ながら認められない。ただ、リマ市の人口や住民の階層に関しては、第５章に次のように述べられている[20)]。

魔大な数のリマの市民は、白人もしくはスペイン人、黒人、インディオ、白人とインディオの混血たるメスティソ、それに前三者のいろいろな組み合わせから生じる様々な混血の人種からなる。

まず、スペイン人家族は相当な数にのぼる。それと言うのも、最も控え目な計算によっても、リマ市在住の白人は1万6000人から1万8000人に達しているからである。しかもここには、ペルー王国全体のなかでも最も著名な、そして卓越した貴族の3分の1ほどが集まっている。彼らの多くはカスティーリヤの古くからの、あるいは新しい爵位によって世に顕彰されている貴族であり、そのなかに伯爵と侯爵だけで45人を数えることができる。また、十字勲章を受けた騎士団の騎士の数もかなりのものである。そのほかにも、貴族や騎士に劣らぬ社会的名声を享受し、同じように優雅で豊かな生活を送っている家族はあまたある。特筆すべきは、莫大な世襲財産に恵まれた24人の紳士で、なるほど彼らは爵位こそ持たないものの、そのほとんどが、いかに由緒ある家柄であるかを如実に物語る、はるかな過去に建てられた、広大な地所に恵まれた大邸宅を所有している。こうした素封家たちのなかに、インカ王家の血を受け継いでいるアンプエロ家がある。アンプエロというのは、ペルー征服時のスペイン人指揮官のひとりの姓で、この指揮官はあるコーヤ（インカ王家の皇女たちはこう呼ばれていた）と結婚した。そして、歴代のスペイン国王は、その高貴な血筋を称えるため、アンプエロ家に数々の栄誉や特権を付与してきた。そのため、市の名家の多くがこの家族と姻戚関係を持つようになり、今ではアンプエロ一族が、リマ市のなかにひとつの町を形成している観さえある。

（中略）

黒人ならびに、黒人と白人の混血であるムラート、そして彼らの子孫が、リマの人口の最も大きな部分を占め、機械的な肉体労働のほとんどを担っている。もっとも当地では、キートにおいて見られるような職業的偏見は稀薄なので、ヨーロッパ人がこの種の仕事に就いていることもある。リマにあっては、なにはともあれ稼ぐこと、いかなる手段に依ろうと、とにかく財を築くことが人びとの最優先の課題なので、ムラートが自分と同じ仕事をしていようと、そんなことはお構いなしなのである。つまり、ここでは利益が諸もろの思惑、あるいは顧慮を超越しているのだ。

大別して3番目の、そして最後の人種は、インディオおよび、インディオと白人の混血たるメスティソであるが、その数は市の大きさ、そして第2番目の人種の占める大きな割合に鑑みると、まことに微々たるものである。彼らの生業は畑を耕すこと、土器を作ること、そして農作物をはじめとする食料品を広場で売ることである。と言うのも、白人家庭での召使いの仕事は、奴隷の、あるいは自由の身の黒人やムラート（通常は前者であるが）によって占められているからである。

E・ロメロによる“*PERU: UNA NUEVA GEOGRAFIA*[21)]”からリマの人口推移を見てみると、表2のようになる。

また、現在のリマ市における人種構成は、白人が15％、混血のメスティソが37％、最も多い

表２　リマ市の人口推移

1535年	70人	1599年	14,262人	1700年	37,257人	1780年	50,000人
1793年	52,627人	1820年	64,000人	1836年	55,627人	1856年	85,116人
1860年	121,362人	1876年	100,156人	1891年	103,956人	1898年	113,409人
1903年	139,409人	1940年	528,532人	1961年	1,783,719人	1972年	3,317,648人

先住民が45％で、残り３％ほどがアジア人や黒人である。数世紀にわたる混血の繰り返しや、リマの肥大化の主たる原因であるアンデス高地からの先住民の大量移動が背景にある。いずれにしても現在とは程遠い、町の主人である白人と、彼らの僕である黒人やムラートが大半の住民であったことがわかる。また先住民の居住区に関しては、イエズス会士のスペイン人クロニスタ、ベルナーベ･コボ（Bernabé Cobo 1580-1657）が、『リマの創建 *Fundación de Lima* 』（1639年）の中で次のように述べている[22)]。

エル・セルカードという集落はこの町〔リマ市〕にある居住区のひとつで、そこにはインディオだけが暮らしており、彼らの教区は別にある。その集落は、かつて町はずれにあった屋敷から８分の１レグア〔約700m〕ほど離れた場所に建設されたが、今では、町が大きくなったため、町と接し、町の一部になっているのである。エル・セルカードが建設された発端は以下のとおりである。総督ロペ・ガルシア・デ・カストロ［1564年にリマに着任し、69年まで総督としてペルー副王領を統治］は、常日頃から賃金を求めて土木事業や畑仕事につくためにやってくるレパルティミエント〔エンコミエンダと同義〕のインディオたちをはじめ、ヤナ［インカ時代から存在した特殊な社会集団で、先住民共同体との絆を断って特定の貴族に帰属して労働力を提供し、免税特権を与えられていた。植民地時代の初期、苛斂誅求に耐えかねた先住民たちの中には、ヤナに転身し、スペイン人に寄生して生きる道を選んだ者も少なくなかった。］やミタヨ［有償の輪番制強制労働（ミタ）に服した先住民のこと。法律では、ミタに服するのは男子の納税義務負担者（18-50歳）と定められたが、実際には年齢や性別に関係なく動員された。］たちが大勢、キリスト教の教えも知らないまま町の中や果樹園や飼育場で働いているのを知り、彼らを一箇所に集住させようと決めた。そのために、総督は健康に適し、土地が肥沃で、水利資源に恵まれた場所を選び、ディエゴ・デ・ポッラス・サグレドなる人物に集落の建設を任せ、その住人の教化を大司教ヘロニモ・デ・ロアイサの承諾を得て、イエズス会の神父たちに託した。フランシスコ・デ・トレド［第５代ペルー副王（在位1568－80年）。着任後、領土の総巡察を実施し、ペルー副王領に安定した支配体制を確立するため、数々の改革を実行に移した。たとえば、インカ時代から存在した輪番制の労働制度であるミタ制をポトシ銀山の開発に利用した。］殿が総督の後を継いだとき、集落はまだ完成していなかった。トレド殿は総督に優るとも劣らずインディオの幸せ（キリスト教への改宗）に心を砕いていたので、集落の建設は神への大いなる奉仕になると判断し、事業の実行を促した。つまり、トレド殿は王立アウディエンシア［植民地に設置された司法関係の上級官僚組織。場合によって

は、行政権や時限立法権も行使した。］の聴訴官クエンカ博士と先にあげたディエゴ・デ・ポッラスに再度、建設を担当させたのである。両人は細心の注意を払って工事を完了し、さらに教会、広場や参事会の館、それに土地のインディオ全員が暮らす住居を完成した。それから、集落を取り囲むように高い塀が建てられ、塀には門がいくつか取りつけられた。門は夜になると閉じられたが、それは、インディオたちがスペイン人や黒人やメスティーソらに悩まされないようにするためであった。すべてが完了したのは1570年のことである。……副王〔フランシスコ・デ・トレド〕はその集落に町とは別の裁判所を設置し、集落をサンティアゴと名づけた。しかし、集落には囲い（セルカ）があるので、私たちはむしろエル・セルカードと呼びならわしている……現在そこには200軒の住居が立ち並び、キリスト教に改宗した8000人のインディオが暮らしている。

1566年に総督ガルシア・デ・カストロの命令で着工されたエル・セルカードは、1571年に建設が完了した。その建設の目的は、リマ市に労働力を提供した先住民たちをキリスト教へ改宗させることにあった、とされているが、実際はスペイン人による酷使などのために激減した先住民を分離して統治する方向へと政策転換したがゆえと考えられる。教会関係者からの圧力もあって、観念的には「スペイン人社会」と「先住民社会」の両立を目指したのであろう。実際のところ、スペイン人社会は先住民の労働力に支えられていたので、先住民に住居を提供してでも確実に労働力を確保しなければならなかったのであろう。しかも、少人数で大勢の未信者を相手に布教活動を行おうとする宣教師たちにとっても、都合の良い政策であったといえよう。

6　都市図に見るリマ市街の展開

（1）17世紀の市街図分析

“*PLANOS DE LIMA 1613-1983*”所収の30葉の地図（以下に○抜き数字で表現する図）で最古のものが、1945年にフアン・ブロムレイ（Juan Bromley）とホセ・バルバヘラテ（José Barbagelata）によって復刻された①［1613年における諸王の都リマ市の都市プラン：Plano de la Ciudad de los Reyes o de Lima en el año 1613］である。これは、副王の依頼でミゲル・デ・コントレラス（Miguel de Contreras）が描き、リマの国立図書館（La Biblioteca Nacional de Lima）に保存されていた肉筆原稿を復刻したものである。市街地から上下左右に発している道が直進せずに斜めに描かれているといった問題はあるが、当時の建造物などの所在も確認でき、市街の構造を見るにはわかりやすい。

図８は、グーグル・アース画像の上にアルマス（マヨール）広場（Plaza de Armas（Plaza Mayor））を基点に①図を貼り付け、いささか補正を加えたものである。東部には難があるものの、セントロ（Centro 旧市街）付近の精度は上質といっても良い。中央部の街路は、北から約40度東に偏したラインに直行する方格地割をなしている。町はずれの東端には、前章で述べたインディオ専住の集落エル・セルカード（PUEBLO DE INDIOS DE SANTIAGO DEL CERCADO）が明瞭に読み取れる。リマック川を渡る橋はまだピエドラ橋（Puente de Piedra）一本だけで、右岸の市街地もまだ数ブロックのみである。主な構造物や広場には符号が打たれ、

側面に一覧表示されている。その凡例訳のカッコ内は、現在の呼称である。市街地の外側には果樹園やオリーブ園、瓦工場といった記載もあり、表２からも４万人前後の市民が住んでいたと推測しうる17世紀初頭のリマの町の様子を髣髴させる。市壁が築かれる前のプランを知る上でも重要な作品である。

先に述べたウリョーアの記載によれが、リマ市は逆三角形の形をしており、上底にあたるリマック川沿いが1920トワーズ［1toise≒2m、3840m］、橋の袂から頂点までが1080トワーズ［約2160m］となっている。また中央広場の一辺は80トワーズ［約160m］、街区の一区画の長さは150バーラ［1vara≒83.59cm、約125m］とのことであった。これらを図８から概略読み取ると、それぞれリマック川沿いの長さが約4000m、頂点までの高さが約1500m、アルマス広場の一辺は約130m、街区の一辺は約120mで、ウリョーアが見た18世紀までほぼ原形を保っていたといえる。

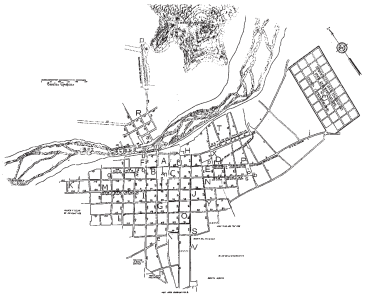

図８　1613年のリマ市と①図

A　副王の館（政庁・大統領府）
B　市会堂（リマ市役所）
C　カテドラル（同）
D　大学
E　宗教裁判所（宗教裁判所博物館）
F　サント・ドミニコ会修道院（同教会・修道院）
G　メルセード会修道院（ラ・メルセー教会）
H　サン・フランシスコ会修道院（同教会・修道院）
I　サン・アグスティン会修道院（同教会）
J　イエズス会修道院（サン・ペドロ教会）
K　天使の聖母会（洗足宗）修道院
L　サン・マルセロ教区教会（同教会）
M　サン・セバスチャン教区教会（同教会）
N　ラ・コンセプシオン女子修道院
Ñ　ラ・エンカルナシオン女子修道院
O　サンティシマ・トリニダード女子修道院

a　礼拝堂
b　セニョーラ・サンタ・アナ病院
c　王立サン・アンドレス病院
d　サン・ペドロ婦人病院
e　サン・ディエゴ施療院
f　サン・コスメ施療院
g　サント精神病院
h　メルセード教団修道院
i　マグダレーナ教団修道院
j　プラドの聖母の館
k　モンセラートの聖母の部屋
l　グァダルーペの聖母の部屋
m　セルカード広場
n　マヨール広場
ñ　ピエドラ橋
o　サンタ・アナ広場

P　サン・ホセ僧院（同教会）
Q　サンタ・クラーラ女子修道院
R　サン・ラサロ教会・病院
S　アトーチャ教会
T　サン・イルデフォンソ学校
U　サント・トリビオ神学校
V　イエズス会神学校
X　サン・フェリペ王立学校
Y　サン・マルティン神学校

p　サント・オフィシオ広場
q　マリア・デ・エスコバール庭園
r　サンティアゴ庭園
s　闘牛場・屠殺場
t　水救済の家
u　芝居小屋（演芸場）
v　跣足宗のポプラ並木

（2）18世紀の市壁に囲まれた市街図分析

リマ市の市壁は、1684年から1687年にかけて、海賊や私掠船の攻撃からリマを守るため、副王 Melchor de Navarra y Rocafull によって手がけられた[23)]。ただ、その直後の1687年10月20日に大震災を受け、全市街が壊滅的な被害をこうむっている。市壁に囲まれたリマ市のプランは８葉もあるが、その中で最も精度が高いとされるのがこの⑥［ペルーの首都リマのプラン：PLAN DE LA LIMA Capitale du Perou］である。フランス人科学者Amédée Frezierが製作し、1716年にパリで"*Relation du Voyage de l'Amérique du Sud aux Côtes du Chily et du Pérou, fait pendant les années 1712, 1713 et 1714*"という本で公刊された。図９は、グーグル・アース画像に⑥図を貼り付け、補正を加えたものであるが、街路のグリッド・パターンの美しさが判るとともに、街区と市壁の間の空閑地の様子、特に東部と南部にかなりな面積があることも、よく読み取れる。東部は、①図で明瞭だったエル・セルカードがすっかり様変わりしている。これらの空閑地は、ウリョーアによれば多種多様な果樹と野菜の植えられた菜園であった。市壁は日干し煉瓦製で、分厚くはあるが場所により大きさはまちまちである。この市壁には34の５角形の稜堡（堡塁）が設置されたが、そこには砲台も銃眼もない。その理由を、「これがもっぱら市街を囲みこむことのみを狙いとしていたからであり、これだけで、インディオたちのどんな奇襲にも対処し得たからである」とウリョーアは述べている。なお市壁には全体で七つの城門と三つの通用口があって、外部との出入りに用いられていた。また市壁に設けられた34箇所の稜堡の位置が、現在のロータリーや広場、交差点などと重なり合っているのも確認できる。

北方から俯瞰した形で立体的に描いた図10の⑤［諸王の都、あるいはペルー王国の首都のプラン：Plano scenographico de la Ciudad de los Reyes, o Lima Capital de los Reinos del Perú］図からは、市壁内の様子が良くわかる。これは、メルセード教団の牧師ペドロ・ノラスコ・メレ（Pedro Nolasco Mere）によって1685年に製図されたものをベースに、フアンとウリョーアが加筆補正して1748年に公表したものである。東端にあった①図のエル・セルカードは、東側の２ブロック分が市壁に替わったと見なせる。その界隈は、⑥図では樹園地や空閑地のように見えるが、⑤図では各ブロックとも家屋が取り巻いている。またリマック川に架かる橋は１本だけで、その名は記載されていない。

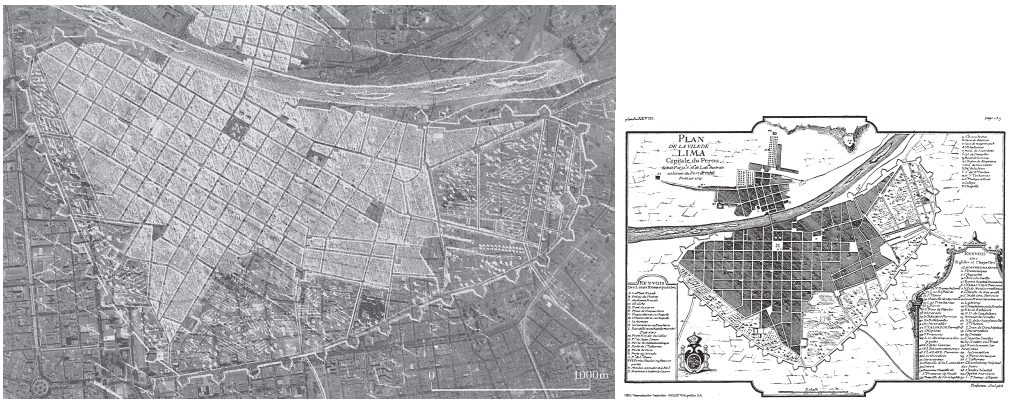

図９　1713年のリマ市と⑥図

街路と市壁のみをシンプルに描いたものが、ホセ・バルバゲラタ（José Barbagelata）による⑧［1821年におけるリマ市の図：Plano de la ciudad de Lima en 1821］図である。これは、フェルナンド・ガミオ・パラシオ（Fernando Gamio Palacio）の "*La Municipalidad de Lima y la Emancipatión*" に収録されたもので、市壁から外へ出る道などはこちらのほうが見やすい。

図10　1748年のリマ市と⑤図

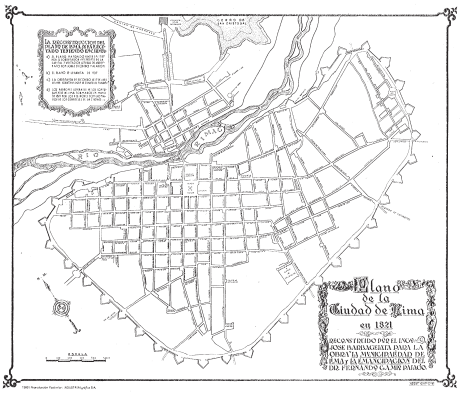

図11　1821年のリマ市と⑧図

（３）19世紀の市街図分析

19世紀にはいると、いよいよ市壁を乗り越えて市街地が拡大していく。Jose Balta が大統領職にあった1872年に、市壁と34の稜堡が取り除かれて市域が拡大していくわけだが、⑫［Plano de Lima por P. V. Jouanny, 1880］図からはその途中経過が読み取れる。ジャニーは二種の図を描いたとされ、国立図書館に存在する方は1872年にアドラー（C. Adler）によってハンブルグで印刷され、リマの市壁が完全に描かれているという。他方はパリでデュフール（F. Dufour）によって記録されたもので、その写しに1885年にエングランダー（M. Englander）が着色した。図12は、グーグル・アース画像にこの図を重ねあわせ、補正したものである。こちらには当時残存していた北東部の市壁と７つの稜堡のみが描かれており、市壁の取り除かれた地が Avenida de Circunvalacion（周回路）と表現され、これが後の東西に長い幅広の並木道グラウ通り（Av.

Grau）と南北に長い幅広の並木道アルフォンソ通り（Av.Alfonso）へと変わっていく様が読み取れる。また、この図までにリマック川に架かる橋はピエドラ橋だけであったが、それはデサンパラドス橋（Puente de los Desamparados）と記載されており、その約600m上流にビテルボ橋（Puente de Viterbo）、400m下流にパルマ橋（Puente de la Palma）と鉄道橋が見える。

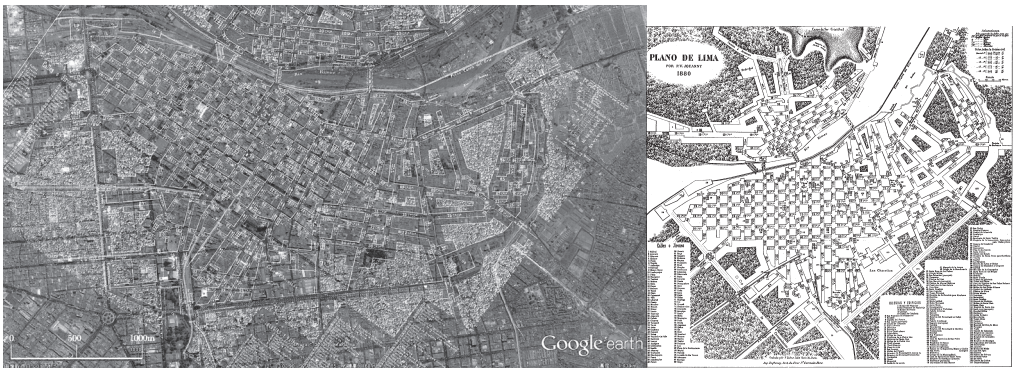

図12　1880年のリマ市と⑫図

むすびにかえて

19世紀末のel Cuerpo Técnico de Tasacionesによって発表された⑬の図には市壁は全くなく、東北端のPlaza de la Unionから南進するAv. de Cirunvalacionの末端に、まだボログネシ広場（Plaza Bolognesi）は見えない。ところが20世紀初頭に有名なエンジニアのM. Basurcoが立案した1904年の⑭図にはボログネシ広場が見え、そこから南西進するAv. Pierola（のちのAv. Brasil）が中央通りとなる設計がなされた。そして市街は6区画で表現され、第4区画が南へ伸び、一番新しい第6区画が東南方向へと伸長していく様が読み取れる。4年後の1908年にエンジニアで測量士のRicardo Tizón y Buenoが著した⑮図を合わせてみると、現在のブレーニャ（Breña）区やヘスス・マリア（Jesus Maria）区、ラ・ビクトリア（La Victpria）区が誕生していく過程である。この動きは一層加速し、外港として成長したカヤオのみならず、リマ市自体が太平洋岸まで成長していくのである。20世紀以降の急速な都市化と都市問題については、紙幅が許さないので新たに稿を草したい。

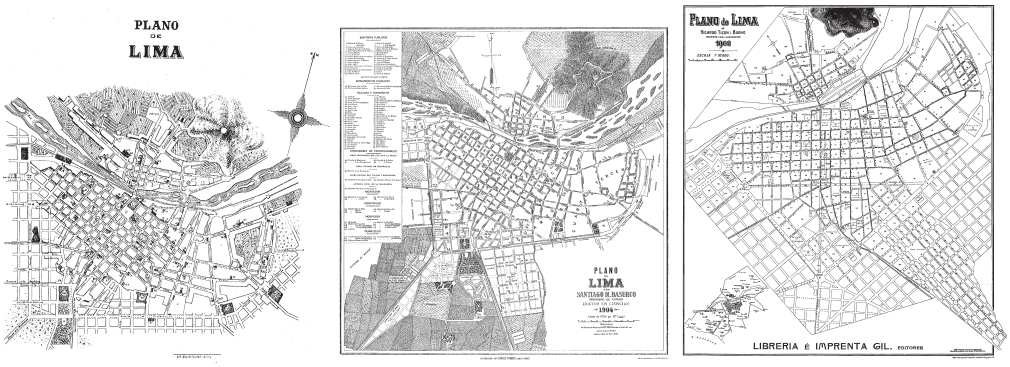

図13　1896年の⑬図（左）、1904年の⑭図（中）、1908年の⑮図（右）

注

1）梅原隆治「リマにおける肥大化するスラム（プエブロ・ホーベン）」、漆原和子・藤塚吉浩・大西宏治・松山洋編『図説　世界の地域問題』ナカニシヤ出版、2007年、pp.68-69。梅原隆治「リマにおけるバリアーダス（非合法街区）の変容」、四天王寺国際仏教大学紀要45、2008年、pp.79-99。

2）Juan Gunther Doering "*PLANOS DE LIMA 1613-1983*" Municipalidad de Lima Metropolitana, Lima, 1983.

3）John Hyslop "*The Inka Road System*" 1984, Academic Press, INC. Orlando の表紙裏'GENERAL MAP OF THE INKA ROAD SYSTEM'

4）B.R.ミッチェル著・斎藤眞翻訳監修『マクミラン世界歴史統計（Ⅲ）南北アメリカ・大洋州篇』原書房、1985年、pp.105-106。

5）染田秀藤訳・解説「47　集住政策と共同体の変容（17世紀初め）」、歴史学研究会編『世界史史料７　南北アメリカ　先住民の世界から19世紀まで』岩波書店、2008年、pp.98-100。

6）染田秀藤訳・解説「42　先住民人口の動態と混血の増加（16-19世紀）」、歴史学研究会編『世界史史料７　南北アメリカ　先住民の世界から19世紀まで』岩波書店、2008年、pp.90-91。出典は染田秀藤編『ラテンアメリカ史－植民地時代の実像』世界思想社、1989年、pp.59・131。

7）牛島信明訳『インカ・ガルシラーソ・デ・ラ・ベーガ　インカ皇統記２』（大航海時代叢書エクストラ・シリーズ２）、岩波書店、1986、pp.115-117。

8）染田秀藤訳『シエサ・デ・レオン　激動期アンデスを旅して』岩波書店、1993年、pp.171-172。

9）山本紀夫『ジャガイモとインカ帝国　文明を生んだ植物』東京大学出版会、2004年、p.154。

10）Santiago Agurto Calvo "*LIMA PREHISPANICA*", Municipalidad de Lima, 1984, p.100.

11）ホルヘ・ハルドイ著、五味俊也訳『コロンブス発見以前のアメリカ』井上書院、1983年、p.87。

12）Santiago Agurto Calvo "*LIMA PREHISPANICA*", Municipalidad de Lima, 1984, pp.161-163.

13）L. G. ルンブレラス著、増田義郎訳『アンデス文明―石器からインカ帝国まで―』岩波書店、1977、p.49、p.58。

14）旦　敬介・増田義郎　訳・注『ペドロ・ピサロ、オカンポ、アリアーガ　ペルー王国史』（大航海時代叢書（第Ⅱ期）16）、岩波書店、1984年、pp.132-136。

15）前掲注14）、訳者注記p.134.136。なお引用文中の［　　］内も訳者注記。

16）増田義郎『アステカとインカ黄金帝国の滅亡』小学館、2002年、pp.188-190。

17）清水透訳・解説「44　植民地の都市空間（16世紀前半―19世紀半ば）」、歴史学研究会編『世界史史料７　南北アメリカ　先住民の世界から19世紀まで』岩波書店、2008年、pp.93-95。

18）前掲注８）、p.172。

19）牛島信明訳、増田義郎注『ウリョーア、フアン　南米諸王国紀行』（17・18世紀大旅行記叢書８）、岩波書店、1991年、pp.335-358。

20）前掲注19）、pp.367-371。

21）Emilio Romero "*PERU : Una Nueva Geografia Tomo II*" Libreria Studium, Lima, p.146.

22）染田秀藤訳・解説「45　都市の先住民居住区（16世紀後半）」、歴史学研究会編『世界史史料７　南北アメリカ　先住民の世界から19世紀まで』岩波書店、2008年、pp.95-97.

23）"*City Walls*" Hephaestus Books, 2011, p.45.